

中古日本語における複合形式についての学説史

山 本 博 子

Historical Survey of Compound Suffixes in Classical Japanese

Hiroko YAMAMOTO

梗概

本論において、中古日本語における複合形式とは、過去を表すとされる単独形式「き」「けり」と完了を表すとされる単独形式「つ」「ぬ」「たり」「り」が組み合わさった「てき」「にき」「たりき」「りき」「てけり」「にけり」「たりけり」「りけり」等の時間に関わる複合形式を指す。

本論は、これらの複合形式についての従来の学説を検討したものである。

検討の結果、明治時代前半においては、複合形式を過去を表す形式の一種とする研究が中心であり、明治時代後半から昭和にかけては、完了の意味を表す形式の一種とする研究が中心であったこと、平成に入っては、新たな文法的立場から複合形式の固有の意味を説明する研究が見られるようになったことなど、時代とともに変遷する学説の流れを明らかにすることができた。

はじめに

本論において、中古日本語における複合形式とは、過去を表すとされる単独形式「き」「けり」と完了を表すとされる単独形式「つ」「ぬ」「たり」「り」が組み合わさった「てき」「にき」「たりき」「りき」「てけり」「にけり」「たりけり」「りけり」等の時間に関わる複合形式を指す。

本論では、これらの複合形式についての従来の学説を検討する。特に、拙論¹においてその意味用法を明らかにした「てき」「にき」「たりき」「りき」に関わる諸説を中心に検討したい。

また、検討対象とする諸説は、明治時代以降のものに限定する。それは、複合形式を単独形式と区別して扱い、その固有の意味用法について検討されるようになるのは、西洋文法の影響を受けるようになった明治時代以降だと考えるからである。江戸時代における本居宣長や富士谷成章の研究にも「たりき」「りき」「にき」「てき」についての記述が見られる²。しかし、本居宣長（1785³）では、係り結びの法則を実証し、「き」「し」「しか」を一つの活用にまとめて示すとともに、「にき」「にし」、「てき」「てし」が示されているにとどまり、複合形式

を単独形式「き」「し」「しか」とどの程度区別していたのかわからず、複合形式の固有の意味用法を明らかにする目的もなかったと考えられる。本居宣長とは異なる活用説を持つ富士谷成章(1778)⁴でも、「倫」に分類された「き」とともに、「にき」「ざりき」「てき」「かりき」等が示され、「身」に分類された「し」とともに「ざりし」「からざりし」「にし」「たりし」「てし」が示されているにとどまる。

具体的な検討に入る前に、明治時代から現代に到るまでの学説の流れを概観しておきたい。

明治時代前半においては、複合形式を、単独形式と対立し固有の意味を持つ形式と見なし、「たりき」「りき」「にき」「てき」等を「大過去」を表すとする研究が中心であった。しかし、関根正直(1895)から大正時代にかけては、「たり」「り」「ぬ」「つ」の意味とする「完了」という文法概念を用いて「たりき」「りき」「にき」「てき」等の意味を説明するようになる。そして、それらを「大過去」などとする見方に疑問を呈すものも現れる。昭和に入っても、引き続き「完了」や「動作態」という概念と「時」の概念とを関係づけることによって「たりき」「りき」「にき」「てき」等を説明するものが見られる。しかし、単独形式の研究がすすむのと同時に、橋本進吉(1935)あたりから、2つの単独形式の意味を足せば自ずと複合形式の意味もわかるはずであるという考え方が支配的になっていく。そのため、複合形式が、単独形式の説明の補足程度にしか示されない傾向が見られるようになる。平成に入り、従来の研究の問題点を踏まえたうえでの新たな文法的立場から、中古語の助動詞の研究がすすめられる。そして、複合形式についても、2つの助動詞の意味を足したものとして説明するのではなく、単独形式との対立のなかでその固有の意味を認めようとする姿勢が見られるようになる。

以下、諸説を、単独形式との関わりのなかで複合形式がどのように位置づけられたのかという観点から大きく4つに分類し、検討していきたい。

1. 過去の一形態としての位置づけ

【中根淑(1876)『日本文典』】

中根淑(1876)は、「過去」を「其ノ時全ク過ギ去リテ、今已遠キ前ノ事トナリタル」「充分過去」と「其ノ事前ニ在リト雖、未全ク過ギ去ラザル者ヲ云フ」「不充分過去」とに区別した。そして、「キ」「ケリ」を充分過去に、「リ」「ヌ」「ツ」を不充分過去に分類した。さらに、複合形式については以下のように述べている。

キ・シ・ケリ等ハ、時アリテ後詞ニ接スル事アリ、即過ギニシ・誓ヒテシ・落チニキ・食ヒテケリ・為シテンヤ等ノ如キ是ナリ 古人ハ、ニキ・ニシ・テン・テメヲ、一語ニ合ハセテ論ジラレタリ (P.12)

複合形式の表す意味等については検討されていないが、複合形式を単独形式と区別して扱

う姿勢が見られる。

【物集高見（1878）『初学日本文典』】

物集高見（1878）以降から、複合形式の単独形式とは異なる意味について論じられるようになる。物集は、「過去辞ハ『読みき』『習ひけり』『読みにき』『習ひにけり』ノき けりにき にけりノ如ク作用ノ活辞ニ附テ其業作ニ過去ノ時ヲ見スニ用フル辞トス」としたうえで、さらにこの「過去辞」を、「き」「けり」「ぬ」「つ」「たり」の「過去」を表すものと、「にき」「てき」「にけり」の「大過去」を表すものとに分けている。「き」については、「思はざりき」「人に養れ志鳥」「夜こそ明け志か」などの例をあげ「此き 志 志かハ共ニ作用言ヲ承レバ其活辞ニ過去ノ時ヲ見ス者トス」と述べている。そして、「にき」については、「思ひにき」「過ぎに志昔」などの例をあげ「此にき に志ハ過去辞ノ相重リテ成レルナルニ因リ其承ル所ノ活辞ニ於テハ大過去ノ時ヲ見ス者トス」とし、「てき」については、「思ひ初めてき」「頼みて志人」などの例をあげ「此てき て志ハ共ニ其承ル作用ノ活辞ニ大過去ノ時ヲ見ス者トス」としている。

【大槻文彦（1890）「語法指南 全」、（1897）『廣日本文典・同別記』】

大槻文彦（1897）でも、「たりき」「にき」「てき」等を「大過去」を表すものとしている。これより前に書かれた大槻文彦（1890）では、「過去、未来、ノ助動詞」の「過去」について、「過去ノ意義、三種ニ分ル」とし、それぞれを「第一過去」「第二過去」「第三過去」と称している。「第一過去」は、「つ」「ぬ」「たり」「り」を用い、「動作ノ、方ニ終ハリタルライフモノ」と説明している。「第二過去」は、「けり」「き」を用い、「動作ノ過ギテ程歴シライフモノ」と説明している。そして、「第三過去」には「てき」「にき」「たりき」等を用いるとし、以下のように説明している。

第三過去ハ、第二ヨリハ、一層程歴タリシライフモノニテ、第一過去、第二過去、ノ助動詞ヲ重用ス。即チ、第一ノつ、ぬ、たり、ノ第五變化ナルて、に、たり、ト、第二ノけり、き、トヲ、重子テ、「押シて、けり、」「押シに、けり、」「押シたり、けり、」「押シて、き、」「押シに、き、」「押シたり、き、」ノ如シ、而シテ其意モ、皆、相同ジ。

(P. 61)

そして、大槻文彦（1897）において、大槻文彦（1890）の「第一過去」に当たる「つ」「ぬ」「たり」「り」を「半過去」、「第二過去」に当たる「けり」「き」を「過去」、「第三過去」に当たる「てき」「にき」「たりき」等を「大過去」と名称を変更している。「第二過去」に当たる「けり」「き」を単なる「過去」としたことから、これらを過去を表す助動詞の中心に据えたと言える。

2. 完了の意味を中心とした位置づけ

【関根正直（1891）『国語学 完』、（1895）『普通国語学 完』】

関根正直（1891）と関根正直（1895）では、時間に関わる助動詞の分類の仕方が大きく異なる。そして、そのことに伴い複合形式についての考え方も変化する。

まず、関根正直（1891）では、物集高見（1878）・大槻文彦（1897）とほぼ同じように、「動詞の時」を「現在」「小過去」「中過去」「大過去」「未来」の4つに分けている。「現在」は、「読む」「学ぶ」などの助動詞のつかない動詞によって、「未来」は、動詞に助動詞の「む」「まし」を添えることによって表されるとしている。そして、「過去」については、「既に過ぎ去りたる動作をいふ辭にて、小過去、中過去、大過去、の別あり」としている。「小過去」は、「今為しをはりたる動作を云ふ辭にて、現在に近きものなり」と定義し、「り」「たり」「ぬ」「つ」によって表されるとし、「中過去」は、「小過去より、やや遠き動作を顯す辭なり」と定義し、「き」「けり」によって表されるとしている。「大過去」は、「中過去より、一層遠く隔りたるを云ふ」と定義し、「此の助動詞にハ、『にたり』『にけり』『にき』『てけり』『てき』『たりけり』『たりき』の七つあれど、いづれも小過去の辭と、中過去の^マと打重りて、大に遠きを、顯す辭となりしものなれば説明に及ばず。小過去中過去の條に准じて心得べし」と述べている。

しかし、関根正直（1895）では、「過去」「未来」という概念に加え、「完了」という概念を用いて助動詞を説明するようになる。そこでは、助動詞を「動作の完了を顯す助動詞」「過去を顯す助動詞」「過去の完了を顯す助動詞」「未来を顯す助動詞」等に分類し、「動作の完了を顯す助動詞」として「り」「たり」「ぬ」「つ」を、「過去を顯す助動詞」として「き」「けり」を、「未来を顯す助動詞」として「む」「まし」をあげている。そして、「過去の完了を顯す助動詞」については、「完了を顯す助動詞に、過去の助動詞の重なりたる」ものとし、「たりき」「たりけり」「てき」「てけり」「にき」「にけり」の6つをあげている。さらに、「過去の完了詞は、歌其他の、語調をうるはしくする文には、唯の過去にて、『けり』といふべき場合にも、『たりけり』『てき』『にけり』などといふ例あり」としている。これは、「けり」「き」と「たりけり」「てき」「にけり」等を、「中過去」と「大過去」とに区別していた関根正直（1891）を、自ら否定した説明と言える。また、関根正直（1891）において、「大過去」に分類されていた「にたり」がこの関根正直（1895）には見られない。「ぬ」と「たり」という2つの「動作の完了を顯す助動詞」の重なったものを、どのように説明すべきかが見出せていないのであろう。複合形式を、2つの助動詞の意味を足したものとして説明することの限界を示していると言える。

【三矢重松（1908）『高等日本文法』】

三矢重松（1908）は、「全過去⁵・大過去といふ名は避くべし」という立場のもと、「てき」「にき」「たりき」「りき」を、「てけり」「にけり」「たりけり」「りけり」等とともに、まとめて「過去完了」つまり「過去に完了したる動作即完了したる動作の過去に在りしを表す者」としている。さらに、「たりき」「りき」「たりけり」「りけり」について、「タリキ リケリの方は存在継続態⁶の過去も交れり」とし、「にき」「てき」「にけり」「てけり」より多くの意味を認めている。しかし、単独形式と異なる複合形式独自の意味用法を積極的に認めようとしていくわけではなく、最終的には「完了過去の決して尋常過去に對せざるを悟るべし」としている。具体的には、「たりき」をはじめとする複合形式では、完了の助動詞が省略されることがあるとし、以下のように述べている。

完了は場合によりては省略することもあるなれば此の過去完了の用法は國語にては實は極めて自由にて、前例の如きも

我が入學	{	したりし
		せし
前に某氏は卒業	{	したりき
		しき

四種の語法あるなり。英文にては過去完了は過去以前の動作に用うる様なれど、それは根本義にはあらで一種の慣用例なるべく思はる。國語を強ふる材料とはすべからず。

(P. 257 ~ P. 258)

【吉岡郷甫（1912）『文語口語對照語法』】

吉岡郷甫（1912）は、「たりき」「りき」「にき」「てき」「にけり」「てけり」は、「完了的過去時⁷」を表すとしている。また、「たりき」「りき」については、「たりけり」「りけり」とともに、「存在的過去時⁸」と「進行的過去時⁹」も表すとし、三矢重松（1908）と同様、「にき」「てき」「にけり」「てけり」よりも多くの意味を認めている。

【小林好日（1927）『國語國文法要義』】

小林好日（1927）は、従来の際に関わる研究を以下のように批判している。

今日の動作は現在、昨日の動作は小過去、一昨日の動作は中過去、一昨々日の動作は大過去など云ふやうに考へた文法家の説などは論ずるまでもあるまいが、過去の前に行はれた動作が大過去、現在より前に行はれた動作が半過去、未來より前に行はれた動作が

去來過去といふやうな説も、また現在に既に終つた動作を現在完了、過去に既に終つた動作を過去完了、未來に終るべき動作を未來完了といふ説も、いづれも時間の種々の段階を考へた説で、みな時の真相を得てゐると謂はれない。(P. 409 ~ P. 410)

そして、「繼續態」「完了態」「存在態」をまとめて「動作態」と称し、「過去・現在・未來」が「主觀の認識の形式」であるのに対し、「動作の客觀的差別性である」と明確に區別した。さらに、「兩者は交渉のあるもので、客觀的に見た動作の完了、之を主觀に移せばすなはち過去である所から、完了を現す語法上の形式が過去をあらはす形式となる如きことは、國語史上にも一般言語史上にも絶えず認められる現象である」という見解を示した。

そのうえで、「文語の過去の助動詞はき及びけりである」という前提のもと、「文語」について「各種の動作態が不定時や過去・現在・未來それぞれの場合にあらはれる形」を以下のような表に示した。

	不定時	現在	過去	未來
完了態	ぬ	ぬ	にき・にけり	なむ
	つ	つ	てき・てけり	てむ
		り	りき・りけり	らむ
		たり	たりき・たりけり	たらむ
存在態	り	り	りき・りけり	らむ
	たり	たり	たりき・たりけり	たらむ
繼續態	り	り	りき・りけり	らむ
	たり	たり	たりき・たりけり	たらむ

(P. 449 ~ P. 450)

【松下大三郎（1898）「日本語の時」、（1928）『改撰標準日本文法』】

松下大三郎（1928）では、完了の意味を中心に据えて「にき」「てき」「たりき」等を説明しているが、松下大三郎（1898）では、「完了」という概念ではなく「既然」という概念を用いてそれらを説明している。

松下大三郎は、1898年に『国学院雑誌』（第5巻 第1・第2）で、「日本語の時」について連載している。そこで、松下は、「時」には「本原時」と「附属時」があるとし、「本原時の關係とは過去、現在、未來、不定時の關係なり」、「附属時の關係とは既然、現然、将然の關係なり」と述べている。さらに、「本原時と附属時とは相結合して、十二個の時となる」とし、以下のような図を示している。

時		附属時		
		現然	既然	将然
本原時	不定時	不定現然	不定既然	不定将然
	現在	現在現然	現在既然	現在将然
	過去	過去現然	過去既然	過去将然
	未來	未來現然	未來既然	未來将然

そして、「過去現然（通例いふ過去）」として「キ」「ケリ」を、「不定既然」「現在既然」として「タリ」「リ」「テアリ」「ヌ」「ツ」を、「過去既然（通例いふ大過去、充分過去）」として「タリキ」「リキ」「ニキ」「テキ」等をあげている。最後に、「時を現在、半過去、過去、大過去、未來、大未來の六つとするは通例なれど深く思はざるものなり」と述べ、大槻文彦（1897）らとは異なる考え方であることを示している。

松下大三郎（1928）では、「完了」という概念を用いて「にき」「てき」「たりき」「りき」について以下のように述べている。

完了的に考へた作用概念を材料とし其れを更に追想的に考へたもの、即ち完了の動詞を更に過去にしたものは完了的過去である。動詞へ「ぬ」「つ」「たり」を附けたもの或は¹⁰既然性轉活用へ更に「き」「けり」を附ければ完了的過去になる。例へば、「花散りぬ」「花散りつ」「花散りたり」「花散れり」は完了であるが之へ「けり」「き」を附けて

花散りにき 花散りてき 花散りたりき 花散れりき
花散りにけり 花散りてけり 花散りたりけり 花散れりけり

とすれば完了的過去になる類である。 (P. 439)

【松尾捨次郎（1933）『国文法概論』、（1936）『国語法論攷』】

松尾捨次郎（1933）は、以下のように「たりき」「にき」「てき」等を「完了の過去」と称している。

つ・ぬ・たり・りの連用形て・に・たり・りに過去の助動詞けりやきの附いたものは完了の過去である。 (P. 150)

また、「過去完了」や「第二過去」ではなく、「完了の過去」と称する理由を以下のように述べている。

之を過去完了といつたり、又第二過去などと名けたりする人があつて、普通の過去以外で過去と相並ぶべきもののやうに説いて居るのは、大なる誤である。過去・未來・と、其の二つの境界となつて居る現在の外に、時がある筈は斷じてない。 (P. 150)

さらに、松尾捨次郎（1936）では、「京にて生れしをんな子、此處にして俄にうせにしかば。

(土佐日記)」をはじめとする実例を示すことによって、複合形式が常に「き」「けり」より以前のことを表すのではなく、過去を表すという時間的意味においては「き」「けり」と共通していることを明らかにしている。

3. 2つの単独形式の和としての位置づけ

【橋本進吉(1935)『新文典別記上級用』】

橋本進吉(1935)は、複合形式の表す意味について、時を表す助動詞だけでなく推量を表す助動詞に関わるものも含めて、以下のように説明している。

文語で、完了の助動詞の下に、過去・未来・推量などの助動詞が重なって用ひられる事があります。その主なるものは本書に挙げました。即ち

- 一、未然形「な」「て」「たら」「ら」に、「む」「まし」の附いたもの。
- 二、連用形「に」「て」「たり」「り」に、「き」「けり」「けむ」の附いたもの。
- 三、終止形「ぬ」「つ」に、「らむ」「べし」「めり」「らし」の附いたもの。
- 四、連體形「たる」に「らむ」「べし」の附いたもの。

などであります。それ等の意味は、一つ一つの助動詞の意味を考へればわかるはずですが、幾分特別なものもあります。(P. 370 ~ P. 371)

そして、以下のような実例をあげ、「にき」「てき」を「～シテシマツタ」と口語訳し、「たりき」「りき」を単に「～シタ」と口語訳している。

○乙酉といひし年、魏又滅びて晋の代にうつりにき。

(正統記、神功皇后) [移ツテシマツタ]

○平家の子孫は……腹の内をあけて見ずと云ふばかりに尋ね取りて失ひてき。

(平家、一二) [殺シテシマツタ]

○故院の御遺誡に任せて、御方にて先を懸けたりき。

(平家、二) [先驅ヲシタ。「たりき」はここでは單なる過去]

○あらゆる庄園郷保に地頭を補せしかば、本所はなきが如くになれりき。

(神皇正統記、後鳥羽天皇) [ナツタ。單なる過去]

(P. 371 ~ P. 373)

「にき」「てき」と「たりき」「りき」との意味の違いについての具体的な説明はない。しかし、橋本進吉(1935)は、両者の過去の表し方における何らかの違いに気づき、「たりき」「りき」を「單なる過去」を表すものとしたと考えられる。¹¹

【時枝誠記（1954）『日本文法 文語篇』】

時枝誠記（1954）も、複合形式の固有の意味用法については述べておらず、「完了の助動詞」「つ」「ぬ」「たり」「り」の「下への接續」として、「てき」「にき」「たりき」「りき」等をあげるにとどまる。例えば、「つ」の場合は以下のように記述されている。

下への接續

未然形、連用形「て」に「まし」「む」「けり」「き」が、終止形「つ」に「べし」「らし」が附いて、「てまし」「てむ」「てけり」「てき」「つべし」「つらし」等の複合助動詞を作る
(P. 150)

【伊藤慎吾（1978）『源氏物語の助動詞 完了態用例の新研究（上）』】

伊藤慎吾（1978）は、『源氏物語』を資料として、助動詞ヌ、ツ、タリの用法を、動詞に注目し実例を検討することにより探ろうとしている。そのなかで、「ツが他の助動詞と複合して動詞に接続するもの」「ヌが他の助動詞と複合して動詞に接続するもの」「タリが他の助動詞と複合して動詞に接続するもの」として、「テキ」「テケリ」「ニキ」「ニケリ」「タリキ」「タリケリ」等の例をあげているが、これらと単独形式との意味の違い等については検討されていない。

【松村明編（1969）『古典語 現代語 助詞助動詞詳説』、

（1971）『日本文法大辞典』、

（1984）『古典を読むための助動詞と助詞の手帖』】

ここでは、松村明が編者である文法書の記述についてまとめて検討する。

松村明編（1969）『古典語 現代語 助詞助動詞詳説』では、大坪併治が、「ぬ」の説明のなかで「にき」を、「つ」の説明のなかで「てき」をあげている。そして、「実現が過去にあった」ことを示すために、「ぬ」「つ」が「き」や「けり」を伴うと説明している。「たりき」「りき」についての説明は見られない。

松村明編（1971）『日本文法大辞典』においても、「たりき」「りき」の項目は設けられていない。一方、「てき」「にき」の独立の項目は設けられており、吉田金彦が、「てき」については「完了の助動詞『つ』の連用形『て』に過去の助動詞『き』のついたもの。動作・作用などの完了したことを回想する意を表わす。『……した』とし、「にき」については「完了の助動詞『ぬ』の連用形『に』に、過去の助動詞『き』がついたもの。物事が完了してしまったことを表わす。『……してしまった』としている。「てき」についてのみ「回想」という言葉を用い、「にき」についてのみ「完了してしまった」ことを表すとするなど微妙な説明の違いが見られる。

松村明編(1984)『古典を読むための助動詞と助詞の手帖』では、西田直敏が、「にき」について「動作・作用が完了したことを表す。……してしまった」とし、以下のような用例とその現代語訳を示している。

- 名にめで折れるばかりぞ女郎花われおちにきと人にかたるな(古今)[女郎花という名前が気に入って手折っただけなのだ、女郎花よ、僧である私が墮落してしまったなどと人には告げるなよ]
 - すぎ侍りにし人を世に思ひ給へ忘るる世なくのみ今に悲しびはべるを(源氏・須磨)[亡くなってしまった葵上をこの上なく思い申しあげ、忘れる時なくいまだに悲しく思っていますのを]
 - はてには朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移りて一夜のうちに塵灰となりにき。(方丈記)[果てには火は朱雀門・大極殿・大学寮・民部省などまで移って、一夜のうちに灰塵に帰ってしまった]
 - 久しからずして亡じにし者どもなり(平家)[栄華を久しく保つことができずに滅亡してしまった者どもである]
- (P.54)

「てき」については、同じく西田直敏が、「動作・作用などの完了したことが確かな過去であることを表す。確かに……した。……してしまった。……した」とし、以下のような用例とその現代語訳を示している。

- 天地の神をもわれは祈りてき(禱而寸)恋とふものはさね止まずけり(万葉)[天地の神々にも私は祈った。しかし恋心というものはまったく止まらないものだった]
 - うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき(古今)[うたた寝に恋しい人の夢を見たその時から夢というものを頼みとするようになったのだった]
 - 此枝ををりてしかば、さらに心もとなくて舟に乗りて(竹取)[此の枝を折ってしまったので、ことさら気がせいてあわただしく舟に乗って]
- (P.52)

なぜ、「てき」に、「にき」にはない「確かな過去」という意味が加えられているのか、具体的な説明がないのでわからない。しかし、引用されている例を見ると、「てき」の例は、すべて自分自身つまり一人称の動作を表していることがわかる。それに対し、「にき」は、はじめの例以外は、話し手でも聞き手でもない、三人称の動作や作用を表している。はじめの例「おちにき」も、動作主体は「われ」という一人称であるが、「と人にかたるな」とあり、女郎花つまり聞き手側がとりあげる動作を問題にしていると言える。また、「にき」の例は、4例とも無意志的な動作や作用を表しているのに対し、「てき」の例は、「(夢を)見てし」以外は、意志的な動作を表していると言える。このような違いを認め、「てき」に「確かな過去」という意味を加えているのならば、注目に値する指摘だと言える。一方、「たりき」「りき」については、松村明編(1969、1971)と同様に説明がなされていない。

4. 新しい文法的立場からの位置づけ

【鈴木泰（1992）『古代日本語動詞のテンス・アスペクトー源氏物語の分析一』】

鈴木泰（1992）は、形態論的立場から、「テンス・アスペクト¹²的意味は、日本語では、動詞の語形の対立のシステムとして存在しているが、これまでの古代日本語の研究では、それは、いわゆる完了や過去の助動詞の意味論という形で、それぞれの助動詞ごとに追及されてきており、それらの間にどういう意味的な対立関係があるのかが正面から問題にされたことはなかった」と従来の研究の問題点を指摘している。そして、助動詞のつかない形や「キ」「ケリ」「ツ」「ヌ」「タリ」「リ」を動詞の語形とし、テンス・アスペクト体系の中に位置づけた。「ニキ」「テキ」「タリキ」等の「複合時制形式」についても、「単純時制形式では表しえないテンス・アスペクト的意味を表し、単なる強めという以上の重要な役割を負うものがある」とその独自の意味を積極的に認め、体系の中に位置づけようとしている。しかし、通達動詞と移動動詞の複合形式についてのみ検討を行なっているため、詳しい考察には到っていない。移動動詞のニキ形については以下のように述べている。

（～ニキ形）

①「宮はきのふより内になむおはしますなる。よべ御車ゐて帰り侍りにき」と申す。

〔句宮は昨日から御所にいるとのことで、現に昨夜は車だけを引いて帰ってきましたと、家臣が言った〕
（宿木・九・五〇）

②尼君、この文を見てかの使ひの大徳に問へば、「この御文かき給ひて三日といふになむ、かの絶えたる峰にうつろひ給ひにし。……」など、〔尼君はこの手紙を見て使者の大徳に聞くと、入道はこの手紙を書いて三日目に人跡絶えたる峰に入ったと、言う〕
（若葉上・六・八六）

①で「帰り侍りにき」には、句宮が昨日は内裏に泊まったと想像する根拠として、車が戻ってきたことは自分の目で確かめていると言っているものである。②は、明石からやってきた使者の話で、自分も山の入り口まで付いていったというのだから、直接に確かめた話である。
（P. 171）

このように解釈したうえで、「～ニキ形には、～キ形のように現在と隔絶された過去の出来事を表す例はないようであり、しかも、②のように、発話時にその動作の結果が持続しているという、パーフェクト的なニュアンスのあるものもある」とニキ形とキ形の違いを指摘している。

- 【吉田茂晃（1992）「『完了の助動詞』考—万葉集のヌとツ—」、
（1993）「『存続の助動詞』考—万葉集の「り」について—」、
（1999）「中古仮名文における〈タリケリ〉について」】

吉田茂晃（1999）は、複合形式と単独形式との間に意味的な対立関係を認めず、複合形式の意味は単独形式の意味の「一部分を強調したものだ」とすることから、鈴木泰（1992）とは異なる文法的立場をとるものと言える。しかし、複合形式を2つの助動詞の和としては説明することができないと述べている点において、橋本進吉（1935）以降とは異なる新たな考え方を提示したと言える。

吉田茂晃（1999）を検討する前に、吉田茂晃（1992、1993）を見ておきたい。吉田茂晃（1992、1993）では、単独形式とは異なる複合形式の固有の意味に気づいているにもかかわらず、それを単独形式の意味の一種として説明している。

吉田茂晃（1992）では、万葉集における「ぬ」と「つ」について考察しているなかで、「なむ」「てむ」そして「てき」「にき」について、以下のように述べている。

ヌ・ツの全用例が常にそういう意味でのアスペクト—発話時現在を基準としてそのときに或る状態が発生しているとか或る動作が完了しているとか—を表わし得ているわけではない。たとえば、

- ・この世にし楽しくあらば来む世には虫に鳥にも我はなりなむ [成奈無]（三八四）
- ・いざ子ども香椎の渦に白妙の袖さへ濡れて朝菜摘みてむ [採手六]（九五七）

などは、そういう言いかたをするならば、未来の或る時点を基準としていると言わざるを得ないし、

- ・藤原の古りにし郷の秋萩は咲きて散りにき [落去寸] 君待ちかねて（二二八九）
- ・思ふにし余りにしかば為方を無み我は言ひてき [五十日手寸] 忌むべきものを

（二九四七）

なども、現在時を基準とする“発生”や“完了”ではあり得ない。こうした、現在時を基準としない用例は、ヌ・ツにあってけっして少なくはなく、その意味では、アスペクトを表わすことがヌ・ツの基本的用法だと考えることはできない。（P.52～P.53）

吉田茂晃（1993）では、「文中の『り』の表現性」について考察しているなかで、「りき」「りけり」などの複合形式についても検討している。

文末に立った終止法「り」は、話手の主観と直接に結びついてアスペクト表現たることができる。前に述べたけれど、「りき」や「りけり」などの場合には、話手の主観を託される権利を、後続する「き」や「けり」に言わば奪われ、対象としてのことがらの内部に押し込まれて、動作態としての持続という、より客体的な内容を表わすことになるのである。（P.25）

そして、以下のようにまとめている。

本稿で検討した「り」もまた、文末においてはアスペクトやテンスを表わすけれど、文中（なかんずく「りき・りけり」のような複合のなか）では、“過程の持続”という動作態を表示しており、その限りでは[ヌーリーツ]という“過程の始発・持続・終結”の組織を構成すると見ることができる。（P. 25）

以上の考え方とは変わり、吉田茂晃（1999）では、複合形式を単独形式と明確に区別し、その固有の意味を見出そうとしている。そして、〈タリケリ〉の意味を考える際の問題点について以下のように述べている。

ふつうには、ある動詞の表現内容に対して助動詞タリが自らの表現内容を付加し、その全体に対してさらに助動詞ケリが自らの表現内容を付加したものが、〈タリケリ〉を含む述語の意味であると解釈されているのではなかろうか。つまり、「タリの意味」と「ケリの意味」とを加算したものが「タリケリの意味」と考えられているわけである。

仮に、文法の教科書にあるように、タリは「完了または存続」を表わし、ケリは「過去または詠嘆」を表わすとするならば、「タリとケリの意味の単純な和」としての「タリケリの意味」は、次に示すような四種類になるであろう。が、はたして、〈タリケリ〉の実際の用例の表現内容は、その四種類に過不足なく一致するのであろうか。

		ケ　リ	
		過去	詠嘆
タ リ	完了	過去における完了	完了した対象への詠嘆
	存続	過去における存続	存続する対象への詠嘆

（P. 45）

上のような問題提議をしたうえで、『源氏物語』『大鏡』などの中古における仮名散文作品の用例を検討し、以下のように「〈タリケリ〉の表わすものは〔タリ＋ケリ〕ではない」という考察結果を示している。（吉田茂晃（1999）が引用した実例は省略する）

—以上、〈タリケリ〉の実例について検討した。

その結果、[過去における存続]用法については確例としてよさそうな例が認められたが、[過去における完了]と[完了した対象への詠嘆][存続する対象への詠嘆]の三用法については、それらの用法に該当すると認められる可能性のある用例は散見されるものの、確実にそれらの用法に数えるべき用例があるとは断言しがたいようである。

とくに、「（単純な）完了ないし過去」や「現在進行中」の用例の中には「詠嘆」性を見出だせないものも多く、それらについては「助動詞タリの意味が顕現したのを受けて助動詞ケリが累加的にはたらいた」とは考えられない。つまり、その〈タリケリ〉の表

わすものは〔タリ+ケリ〕ではない、と考えざるを得ないのである。(P.48)

また、吉田茂晃(1999)は、〈タリケリ〉の意味を明らかにするための足掛かりとして、〈タリキ〉〈タリ〉の表現内容を概観している。〈タリキ〉については、「現在時における存続を表わすのではないかと思われる」例や『『詠嘆』性を感じさせる』例がないことが、〈タリケリ〉との大きな違いであると指摘している。

最後に、〈タリケリ〉の表わす意味が2つの助動詞の加算でないとするならば、どのように説明することができるのかを考察している。

ケリやキが下接することによって、タリが本来持っている表現の可能性のうち、ある一部が制限されたり、ある一部が強化されたりするのではないかと推測される。

比喩的に言うなら、〈タリケリ〉の意味は「タリとケリの和(タリ+ケリ)」ではなく「タリとケリの積集合(タリ \cap ケリ)」なのではあるまいか。〈タリ〉が包括的に[完了]を表わすとするなら、それに対して〈タリケリ〉は、[過去における完了]ではなく、[完了性の強い過去]あるいは[過去であることが明らかな完了]を表わすものと解釈できる。

つまり、〈タリケリ〉におけるタリとケリという二つの助動詞は、内容的にかなりの重なりを持っており、両者の重複した部分が〈タリケリ〉の表現内容となるということである。それは、外延としては、〈タリ〉の表わす「包括的な[完了]」の外に出るものではなく、その一部分を強調したものだ、ということになる。(P.52)

【山本博子(2000)「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形の違い」、

(2002)「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形のアスペクト的意味の違い」、

(2003)「中古語におけるキ形とタリキ形の違い」、

(2004)「中古語におけるタリキ形の意味—キ形との比較を通して—】

山本博子(2000、2002、2003、2004)は、鈴木泰(1992)の文法的立場と同様に、複合形式を単独形式と対立する重要な語形と見なし、固有のテンス・アスペクト的意味を持つものとして調査をすすめている。具体的には、『源氏物語』『宇津保物語』などの物語作品を資料として、会話文の終止用法におけるニキ形・テキ形、タリキ形・リキ形が、過去を表すキ形に対してどのような意味特徴を持つのかを検討している。

山本博子(2000)では、キ形には現在からきりはなされたアオリスト的過去を表す例が多いのに対し、ニキ形・テキ形には現在と関わりのあるパーフェクト的過去を表す例が多いことを明らかにしている。ニキ形・テキ形については、以下のような例を示し考察している。¹³

「いでや、聞えてもかひなし。御方は早う亡¹³せ給ひにき」と言ふまゝに、三人ながらむせかへり、いとむつかしくせきかねたり。〔右近が、「申し上げてもどうにもなりません。御方(夕顔)はすでに亡¹³くなっています」と言う、その場にいた三人

ともむせかえり、涙を押さえかねている] (『源氏物語』玉葛)

これは、右近が、かつて夕顔に仕えていた人達に夕顔の死を伝えている場面である。夕顔が死んでしまったという過去の出来事は、夕顔はもうこの世にはいない、したがって誰も夕顔に会うことはできないという現在の状況ときりはなして伝えることはできないであろう。 (P.44)

「中務の宮の姫君に、その夜の事を語り聞えさせしを、やがてそのまゝに絵に書き給へりし。みこの御容貌はうるはしく、めでたくて、いとようこそ似たりしか。「大将の御有様ぞ、筆及ぶべうもなき」とて、果ては破り給てき」など語れば、三の宮とおぼえ給、少し起きあがりて、「その絵を、など見せざりける。心憂かりけり」と恨み給けはひ、幼びて、ふくらかに愛敬づき、愛しげに見え給ふ。〔ある女房が「中務の宮の姫君に、天稚御子が天降りした夜のことをお話ししたところ、すぐに絵に描かれました。御子の御容貌は、美しくすばらしくて、とてもよく似ていました。『狭衣大将の美しい様子に、筆が及ぶはずがありません』と言って、最後には破ってしまいました」などと語ると、三の宮と思われる方が、少し起き上がって「その絵をどうして見せなかったのですか。残念です」と恨んでいる様子は、幼くふっくらとしてかわいらしい] (『狭衣物語』)

これは、狭衣が弘徽殿に行き、女二の宮を垣間見している場面である。絵を見ることができずに残念がる三の宮の発言から、「破る」という姫君の動作が、絵がないという現在の結果の状態も含めてとりあげられていることがわかる。 (P.45)

山本博子(2002)では、キ形とニキ形・テキ形のアスペクト的意味に注目し、基本的に、キ形は継続的意味を表すのに対し、ニキ形・テキ形は完成的意味を表すと述べている。

山本博子(2003)では、移動動詞・通達動詞・思考動詞・やりもらい動詞に注目し、キ形とタリキ形¹⁴の意味の違いについて、メノマエ性という概念を用いて検討している。メノマエ性とは、松本泰丈(1993)¹⁵が、「基本的に、はなしてが自分でみていることをのべることにかかわっている」とし、「テンスやアスペクトが、デキゴトをなりたたせる舞台の時間的なしくみをうけもつカテゴリーであるのに対して、メノマエ性は、直接には、時間表現にかかわる以上に、空間表現にこだわるカテゴリーだといえそうである」と説明している文法概念である。検討の結果、基本的に、キ形は過去におけるメノマエ性を問題にしていないのに対し、タリキ形は過去におけるメノマエ性を表すという違いを明らかにしている。

メノマエ性を表す移動動詞のタリキ形の例としては、以下のような例をあげている。

宰相、「まだ小野に侍りし時、宰相の中将ものし給ひたりき。『「あはれにあなること」など、時々たまふ』となむ告げし」などて、御返り書き給ふ。

(『宇津保物語』国譲・上)

(P.47)

そして、この例について「宰相（実忠）が、小野に隠遁していた時に、宰相の中將（祐澄）が尋ねに来たことを話している場面である。その際に祐澄に告げられた言葉なども話題にされていることから、『ものし給ひたりき』が、過去において、話し手が移動動作の到着地点において、移動主体が到着したことを目撃していた場合に用いられていることがわかる」と説明している。

山本博子（2004）では、タリキ形の意味についてさらに考察を深めている。そして、メノマエ性を表さないタリキ形の例にも着目し、「過去における運動や状態を確実にあった具体的な事実としてとりあげる点においては、メノマエ性を表す例と同一である」と指摘している。メノマエ性を表さない移動動詞のタリキ形の例として、以下のような例をあげ説明している。

「……かの殿に侍りし時、兵衛の君に、『御声をだに聞かせよ』と責めしかば、中のおとどの東の簾と格子との狭間になむ入りたりし。……」。(『宇津保物語』国譲・上)

これは、実忠が兄実正に、藤壺をはじめて見た時のことを話している場面である。「右大臣殿の邸におりました時、兵衛の君に『お声だけでも聞かせて下さい』とお願いして、中の大殿の東の簾と格子の間に入ったのです」などとその時の様子を詳しく語っている。この「入りたりし」は、一人称つまり話し手自身の移動動作を表しているため、過去におけるメノマエ性を表していないと言える。しかし、自らの運動を、確実にこなされた具体的な事実として表していると言うことができる。

(P.57)

おわりに

以上、明治時代以降における中古日本語の複合形式についての諸説を検討した。

その結果、時代とともに変遷する諸説の流れを概観することができた。

一方、「てき」「にき」「たりき」「りき」等を個別に扱い、その固有の意味を見出そうとする研究は未だに多くないことがわかった。中古語における時間表現の全貌を明らかにするためには、単独形式だけでなく、複合形式についても今後さらに詳細な研究を行なう必要があると考えられる。

検討文献一覧

- 中根 淑 (1876)『日本文典』(森屋治兵衛)
 物集高見 (1878)『初学日本文典』(松栄堂)
 大槻文彦 (1890)「語法指南 全」(『言海』所収)
 関根正直 (1891)『国語学 完』(弦巻書店)
 関根正直 (1895)『普通国語学 完』(六合館書店)
 大槻文彦 (1897)『廣日本文典・同別記』(私家版)(1980年 勉誠社より復刻)
 松下大三郎 (1898)「日本語の時」(『国学院雑誌』5-1・5-2)
 三矢重松 (1908)『高等日本文法』(明治書院)
 吉岡郷甫 (1912)『文語口語對照語法』(光風館)
 小林好日 (1927)『國語國文法要義』(京文社)
 松下大三郎 (1928)『改撰標準日本文法』(紀元社)(1974年 勉誠社より復刻)
 松尾捨次郎 (1933)『国文法概論』(中文館)
 橋本進吉 (1935)『新文典別記上級用』(富山房)
 松尾捨次郎 (1936)『国語法論攷』(1961年 白帝社より復刻)
 時枝誠記 (1954)『日本文法 文語篇』(岩波書店)
 松村明編 (1969)『古典語 現代語 助詞助動詞詳説』(學燈社)
 松村明編 (1971)『日本文法大辞典』(明治書院)
 伊藤慎吾 (1978)『源氏物語の助動詞 完了態用例の新研究(上)』(風間書房)
 松村明編 (1984)『古典を読むための助動詞と助詞の手帖』
 (『国文学 解釈と教材の研究 六月臨時増刊号』29-8)
 鈴木 泰 (1992)『古代日本語動詞のテンス・アスペクトー源氏物語の分析ー』(ひつじ書房)
 吉田茂晃 (1992)「「完了の助動詞」考一万葉集のヌとツー」(『万葉』141)
 吉田茂晃 (1993)「「存続の助動詞」考一万葉集の「り」についてー」(『万葉』147)
 吉田茂晃 (1999)「中古仮名文における〈タリケリ〉について」
 (天理大学国語国文学会『山邊道』43)
 山本博子 (2000)「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形の違い」
 (お茶の水女子大学国語国文学会『国文』93)
 山本博子 (2002)「中古語におけるキ形とニキ形・テキ形のアスペクト的意味の違い」
 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究年報』25)
 山本博子 (2003)「中古語におけるキ形とタリキ形の違い」
 (お茶の水女子大学大学院人間文化研究科『人間文化研究年報』26)
 山本博子 (2004)「中古語におけるタリキ形の意味ーキ形との比較を通してー」
 (東京大学国語国文学会『国語と国文学』81-4)

注

- 1 山本博子(2000、2002、2003、2004)を参照されたい。
- 2 江戸時代における過去表現の研究については、小林好日(1935)「過去辭の學説史」(東北帝國大學法文學部『十周年記念 史學文學論集』岩波書店)に詳しい。
- 3 本居宣長(1785)『詞の玉の緒』(雙文館)
- 4 富士谷成章(1778)「あゆひ抄」(中田祝夫・竹岡正夫(1960)『あゆひ抄新注』風間書房 所収)

- 5 中古語における複合形式については論じていないが、佐々政一(1901)「動詞の「とき」に就て」(『帝國文學』7-4)は、「中古語の『とき』を説明すべき標準」とする目的のもと、「現今の口語の『とき』」について検討している。そこでは、「過去」「現在」「未来」を「單純なるとき」とし、「全現在」「全過去」「全未来」を「複雑なるとき」としている。「全過去」については、以下のように説明している。
全現在の助動詞に、過去の助動詞を接續して表はす、例へば、「私が芳野に居た時に、花がさいてゐた」といへば、「芳野に居た」といふ過去の時の以前に、「咲く」といふ出來事ありて、其結果が、「居た」といふ時(即ち過去の時)になほ繼續せりしなり (p.8)
- 6 三矢重松(1908)は、「口語」の例を出し、「雨が降って居る」は動作の繼續もしくは存在を表し、「草が生えてゐる」は動作の存在もしくは繼續を表し、「景氣が好い方に向いてゐる」は動作の進行もしくは存在を表すとしている。
- 7 吉岡郷甫(1912)のいう「完了時」とは、「動作の丁度終つたの」を指す。例として「曙光は見えそめつ」「時計が十時を打つた」などをあげている。
- 8 吉岡郷甫(1912)のいう「存在時」とは、「動作の結果の現に存在して居るの」を指す。例として「山頂に記念碑立てり」「橋が架けてある」などをあげている。
- 9 吉岡郷甫(1912)のいう「進行時」とは、「動作が現に進行して居るの」を指す。例として「鳥群りて鳴けり」「鳶が青空を舞つて居る」などをあげている。
- 10 松下大三郎(1928)のいう「既然性轉活用」とは、助動詞「り」を指す。
- 11 橋本進吉(1935)よりも大分前にまとめられ、文法的な考え方も異なるものであるが、山田孝雄(1908)『日本文法論』(寶文館)も、複合形式を単独形式の補足程度にしか扱っていない点においては、橋本進吉(1935)らと似た立場として位置づけることができる。山田孝雄(1908)は、「從來『活くてにをは』又は動辭、助動詞と稱せられたる者」を、「用言其の者の本源的語尾ありてそれぞれ陳述の用をなせるに、なほ一層複雑なる意義をあらはさむが爲に其の本源的語尾に更に附屬する一種の語尾」とし「複語尾」と称した。そして、複語尾を「屬性の作用を助くる複語尾」と「統覺の運用を助くる複語尾」とに大別したうえで、「統覺の運用を助くる複語尾」の「陳述の確めに關するもの」として「つ」「ぬ」「たり」を、「回想をあらはすもの」として「き」「けり」をあげた。そのうえで、『たり』は『たり』『ざり』の外すべての統覺の複語尾を伴ふものなり」とし、「たりき」「たりけり」などをあげ、「陳述の確めをあらはす複語尾は他の統覺の運用を助くる複語尾を下に屬せしめうるなり」とし、「てき」「てけり」「にき」「にけり」などをあげている。複合形式の表す固有の意味等については述べていない。
- 12 鈴木泰(1992)は、テンスは「伝達される運動や状態が発話時より以前に起こったことか、ないしは発話時と同時に起こっていることかという、発話時を基準として見た運動や状態の時間的位置を表す文法範疇である」とし、アスペクトは「基準時間において、運動がそれに内在するどれかの局面の持続過程にあるか、又はそうした局面に分割されないひとまとまりのものとしてあるかという、基準時間における運動の時間的展開のあり方を表す文法範疇である」としている。
- 13 以下、山本博子(2000、2003、2004)からの引用例については、適宜通し番号等を省略して示す。
- 14 山本博子(2003、2004)では、タリキ形とリキ形について、接續する動詞の活用が異なるだけで意味の違いがないと考えることから、これらを区別せずに扱い、一括してタリキ形と称している。
- 15 松本泰丈(1993)「〈メノマエ性〉をめぐって—しるしづけのうつりかわり—」(『国文学 解釈と鑑賞』58-7)